

吉田城の輝き

高 田 康 成 Yasunari TAKADA

待兼山の大阪大学言語文化部で職場をともにしていたころ、当時ほとんど着る人のなかった（やや高めの）スタンド・カラーの粹な白いシャツを着こなした吉田城は、求めに応じて他人の仏語論文タイトルを校正しながら、comparaisonはよく英語のcomparisonと混同されて間違えるのだと例のように滑らかに言いながら、ひょいと赤ボールペンをどこからともなく取り出して、さっと直してしまった。場所は新営なった建物ながら「コピー室」と呼ばれた雑然としたところだったと記憶するが、さわやかな初夏の太陽に粹な白いシャツが彼の存在とともに輝いていた。一九八〇年代の初めのことである。恋人でもないのに、髪の毛の一本一本が、同様にきらきらしていたことを今に覚えているのは、不思議といえば不思議である。

すべてがヴァーチャルなもので置き換えられて少しも怪しまない時代風潮にあって、吉田城という存在は人と人の出逢いが決定的なある種の厚みをもって迫るものであることを確認させてくれる。ある種の厚みというのは、やや神秘めく事態ではある。それが移ろい行く時に属する問題なのか、あるいは時を越える永遠といわれるような次元に関わるものなのか詳らかとしないが、ともかく、古来、「時と永遠」の問題として考えられてきた事態に関係する事柄であることは確かで、そのようなかけがえのない存在のひとつの意義深い様態を、吉田城はわれわれに軽妙極まりない仕方でもたらしてくれた。

それは政治家とか実業界に生息するような人物が能くする類の粗野なカリスマ性とは言うまでもなく無縁で、繊細な感性と敏捷な知性を素地にしてはじめて発しうる存在感のそよ風に他ならない。その知性の鍛錬が根本において洗練されたフランス仕込みのせいだろうか、彼の圧倒的存在感を伝える颯爽たる漣は、よどみなく発せられる流麗な言葉と水際立って洒落たいでたちに、またとなく相応しい表現媒介を見出した。それがこの寡黙と一種バンカラ風をよしとする東洋の島国においても一向に違和感を与えるでもなかったのは、ひとえに吉田城という存在の天使性であった。

あの犀利な頭脳はまた好奇心の塊といった面があって、わたしなどが噂にさえ聞いたことがない漫画やベストセラーに常に通じていた。と言うより、わたしはその対象自体を知らなかったのであるから、「通じていたと聞く」と表現するのが論理的に正しいのかもしれない。言語文化部には正式には事務補佐員

と呼ばれる若い独身の女性たちがいて、当然にして若い独身の男性教官たちは彼女らとわいわい楽しむことを日々の糧としていたところがないわけではなかった。ところが、彼女たちとの洒落た会話となると既に独身でなかった吉田城の独壇場である。独身男性教官の齒嚙みをよそに、彼女らの興味に精通することでは吉田城の右に出るものはいなかったのだ。「城さんは、XXXの漫画を全部読んでいたわ」と彼女たちの一人が眼を輝かせて言うのを聞いた私は、「鏡花を読むとは本格的ですね」と私の研究室の本棚に並んだ殆ど読まず仕舞いの鏡花全集を見た吉田城がぼつんと呟いた言葉を想い起こして、世の中にはやはり選ばれた人がいるのだと半ば悲しい気持ちになったことを忘れない。

京都の吉田城は中世仏文学のテキストを携えていた。彼が京都大学文学部に移籍するのとはほぼ時を同じくして、私も阪大から東北大学文学部へと職場を転じた。仙台へ移る直前、ある用向きのために京都でしばし会う機会があったが、珍しくまともな話をして、京大文学部は小さな細切れの論文を多く生産するよりも、むしろ時間をかけて大きな仕事を出すことを奨励するのだと、例によって軽やかに語っていたことが印象的だった。そのときの彼の様子といえど私たちは残念ながらよく覚えていないが、鞆をもつでもなく、ただフランス語原書一冊を手を持っていた。それが中世仏文学のテキストらしいことは、私のような門外漢にもすぐ分かり、すかさずその理由を尋ねると、仏文学史講義のためという応答だったかと思う。その書物を再び手に携えて、颯爽と帰る彼の後姿を眺めながら、なるほどこのフランス語の達人には、中世の原典といえども、近現代の作品となんら変わるところがなく、文庫本よろしく手軽に持ち歩きながら消化して講義に供するのかもしれないと、いささか呆れ、大いに敬服した。こちらはと言えば、これから東北大学で中世・ルネサンス英文学を講じることについて、些かの矜持を抱いていなかったわけではないのだ。

一九八六年の夏、吉田夫妻とパリで合流する機会に恵まれた。プラス・ドゥ・ランジスの寓居に数ヶ月滞在していたわたしたち一家を夫妻が訪れてくれた日は、夏のすがすがしい太陽が照り輝いていた。もとよりバルコニーなどない狭い空間であったが、窓辺に座った吉田城の斜め後ろからは、彼の輝きを裏打ちするような清純な日の光が白いカーテンを通して射し込んでいた。われわれ一家には、二歳に満たない女の子がいたが、ゆくりなくも私はその子に対する吉田城のごく自然な接し方を垣間見て、それまでは知るよしもなかった彼の新たな側面を見た思いがした。(その後、彼は果たして子煩悩となった。) その日はその後、みなで連れ立って十三区の中華街へ行き、たくさん食べ大いに語らったが、われわれにとってそこは既にパリではなく殆ど大阪と化していた。

吉田城と最後に会ったのは、二〇〇四年の十二月、（京王井の頭線）駒場東大前駅のホームにおいてであった。ロラン・バルトに関するシンポジウムが駒場で開催され、丁度その打ち上げにと彼は関係者とともに渋谷に向かうところだった。シンポジウムのことも忘れるくらい非文化的な雑用に追いまわられていた私は、ただ疲弊してホームに入ってしまったのだった。ひときわ背の高い蓮實重彦先生はすぐそれと確認されたが、そのすぐ横に、一瞬驚きと喜びの逡巡が伴ったものの、同様にそれとすぐ分かる顔が見えて、それが吉田城だった。瞬時ながら、このしばらくぶりの邂逅は、目じりの皺の数だけ知らず知らずのうちにお互いの歩みが進んでしまったことを確認させたが、握手を交わしながら彼が見せた笑顔の口元に、私は例によって変わらぬあの輝きともに訪れる存在の厚みを久しぶりに感得した。

（たかだ・やすなり 東京大学大学院総合文化研究科教授）